

三鷹市美術ギャラリー収蔵作品展 V

後期：2024年7月13日(土)～8月18日(日)

会場：三鷹市美術ギャラリー 主催：三鷹市美術ギャラリー・(公財)三鷹市スポーツと文化財団

出品リスト (展示順)

作品番号	作家名	作品名	制作年	技法/材質	備考
	横山操	小説「石版東京図絵(作：永井龍男)」挿絵原画	1967年	墨/紙	毎日新聞夕刊連載全127回(内、5回分欠落)
57		振り出し		題字カット	
65		秋季大祭		題字カット	
79		活動写真		題字カット	
85		抜け裏		題字カット	
98		大売出し		題字カット	
115		松の内		題字カット	
125		小僧		題字カット	
137		徴兵検査		カット	*新聞未掲載
138		坂		題字カット	
150		門		題字カット	
166		かぎざき		題字カット	
179		バラック		題字カット	
190		草の実		題字カット	
208		あとがき		題字カット	
58-64		振り出し		第1回～第7回	
66-78		秋季大祭		第8回～第19回	
80-82		活動写真		第20回～第22回	
					*第23回は欠落
83-84		活動写真		第24回～第25回	
86-97		抜け裏		第26回～第35回	
99-114		大売出し		第36回～第48回	
116-124		松の内		第49回～第56回	
126-136		小僧		第57回～第66回	
139-149		坂		第67回～第75回	
151-165		門		第76回～第86回	
167-178		かぎざき		第87回～第97回	
180-183		バラック		第98回～第101回	
					*第102～105回は欠落
184-189		バラック		第106回～第111回	
191-207		草の実		第112回～第126回	
209		あとがき		第127回	
参考1		小説「石版東京図絵」スクラップブック			毎日新聞夕刊連載全127回切り抜き
参考2	永井龍男	『石版東京図絵』1967(昭和42)年発行	中央公論社		横山操の挿絵掲載はなし(版刻者：川上澄生)
参考3	永井龍男	『石版東京図絵』1975(昭和50)年発行	中央公論社(中公文庫)		横山操の挿絵掲載はなし(カバー：川上澄生) 目次なし・挿絵(川上澄生)あり・解説(福田宏年)あり
参考4	永井龍男	『石版東京図絵』2004(平成16)年発行	中央公論新社(中公文庫)		限定復刻版 横山操の挿絵掲載はなし(カバー：川上澄生) 目次あり・挿絵なし・解説なし

作品番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法/材質	エディション
56	横山操	格納庫 (調布飛行場) (仮称)	450×514mm	1958年	パステル/紙	
211	横山操	野川風景 (仮称)	318×408mm	1972年頃	パステル/紙	
212	横山操	野川風景 (橋のある川) (仮称)	316×405mm	1972年頃	パステル/紙	
213	横山操	国際基督教大学教会堂 (仮称)	333×251mm	制作年不詳	墨/紙	
214	横山操	夜の教会 (仮称)	331×245mm	制作年不詳	コンテ/紙	
215	横山操	けやきのある家 (仮称)	331×242mm	制作年不詳	墨/色紙	
216	横山操	樹木 2 (仮称)	452×373mm	制作年不詳	コンテ/紙	
217	横山操	藁葺きの農家 2 (仮称)	381×540mm	制作年不詳	鉛筆/紙	
218	横山操	橋のある風景 1 (仮称)	449×514mm	制作年不詳	コンテ/紙	
219	横山操	橋のある風景 2 (仮称)	313×364mm	制作年不詳	墨/紙	
220	横山操	風景 (仮称)	295×353mm	制作年不詳	パステル/紙	
210	横山操	むさし乃	426×638mm	1972年	紙本彩色	
240	米谷清和	冬の停留所	1167×1167mm	1979年	岩絵具/雲肌麻紙	
241	米谷清和	Phone	1303×1621mm	1983年	岩絵具/雲肌麻紙	
242	米谷清和	家族	2150×1850mm	1983年	岩絵具/雲肌麻紙	
243	米谷清和	夕暮れの雨	1900×2000mm	1992年	岩絵具/雲肌麻紙	
244	米谷清和	雨に聳える	1620×2270mm	1996年	岩絵具/雲肌麻紙	
245	米谷清和	春の頃	1167×1167mm	2001年	岩絵具/雲肌麻紙	
246	米谷清和	水温む頃	727×530mm	2014年	岩絵具/雲肌麻紙	
247	米谷清和	雪、すさぶ日も	1813×2273mm	2015年	岩絵具/雲肌麻紙	
248	李禹煥	項 A	590×835mm	1970年	ステンシル/紙	2/20
249	李禹煥	項 B	590×835mm	1970年	ステンシル/紙	2/20
250	李禹煥	項 C	590×835mm	1970年	ステンシル/紙	2/20
251	李禹煥	FROM LINE 1	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
252	李禹煥	FROM LINE 2	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
253	李禹煥	FROM LINE 3	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
254	李禹煥	FROM LINE 4	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
255	李禹煥	FROM LINE 5	270×365mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
256	李禹煥	FROM LINE 6	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
257	李禹煥	FROM LINE 7	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
258	李禹煥	FROM LINE 8	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
259	李禹煥	FROM LINE 9	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50

作品 番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法/材質	エディ ション
260	李禹煥	FROM LINE 10	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
261	李禹煥	FROM LINE 11	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
262	李禹煥	FROM LINE 12	275×338mm	1981年	ドライポイント /紙	12/50
271	李禹煥	With Winds	1620×1300mm	1992年	油彩/カンヴァス	
263	李禹煥	出港地 A	1900×1300mm	1991年	リトグラフ/紙	1/30
264	李禹煥	出港地 B	1900×1300mm	1991年	リトグラフ/紙	1/30
265	李禹煥	出港地 C	1900×1300mm	1991年	リトグラフ/紙	1/30
266	李禹煥	出港地 D	1300×2000mm	1991年	リトグラフ/紙	13/30
267	李禹煥	寄港地 1	890×755mm	1991年	リトグラフ/紙	22/50
268	李禹煥	寄港地 2	890×755mm	1991年	リトグラフ/紙	45/50
269	李禹煥	寄港地 3	890×755mm	1991年	リトグラフ/紙	29/50
270	李禹煥	寄港地 4	890×755mm	1991年	リトグラフ/紙	47/50
272	李禹煥	Correspondence	570×760mm	1996年	水彩/紙	

※No.1-55,221-239, 273-275は前期（会期終了）展示

「石版東京図絵」

1967（昭和42）年1月4日から6月1日にかけて毎日新聞に連載された小説で、作者は永井龍男。挿絵は横山操が担当。

明治・大正の東京下町、市井の人々の暮らしや職人の世界、関東大震災、戦争によって町や人が変わっていく様子が、東京神田に住む関由太郎の成長をとおして描かれている。

作家解説

横山操 YOKOYAMA Misao

1920（大正9）-1973（昭和48）年

新潟県西蒲原郡吉田村（現・燕市）に生まれる。1922年横山家の養子となる。小学校5年生から絵を描き始め、1934年吉田尋常高等小学校（現・十日町市立吉田小学校）卒業後には、画家になることを志して上京し、神田錦町の塗料店に住み込みで働く。その後、光風会会員の画家・石川雅山の内弟子となり、版下やポスター描きを手伝いはじめる。石川雅山の勧めで翌年日本画へと転向し、川端画学校日本画部（夜間部）に通いはじめる。1940年「第12回青龍展」で初入選となり川端龍子の目に留まる。同年召集され、中国各地を転戦する。1945年敗戦と同時にカザフ・ソビエト社会主義共和国（現・カザフスタン共和国）に抑留される。1950年復員。1956年銀座松坂屋にて初個展を開催、同年「第28回青龍展」にて《炎炎桜島》が青龍賞を受賞する。1959年三鷹市大沢に自宅とアトリエを建てる。1965年から多摩美術大学日本画科で実技指導にあたる。1966年多摩美術大学日本画科教授就任。1973年、死去。享年53歳。

米谷清和 YONETANI Kiyokazu

1947（昭和22）年-

福井県福井市生まれ。1963年福井県総合美術展に初入選する。高校1年生の時に日本画家・横山操に憧れ、その指導を受けるために1967年多摩美術大学日本画科に入学する。1969年横山操奨学金による欧州旅行でイギリスやイタリアなどを巡る。1972年「第4回日展」に初入選。1973年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻を修了する。1977年日展で《刻々》が特選受賞し、翌年「第1回東京セントラル美術館日本画大賞展」に出品し佳作賞を受賞する。1981年より多摩美術大学日本画科講師を務める。1984年横の会の結成に参加。1998年多摩美術大学日本画科教授に就任。2017年同大学を退職する。多摩美術大学名誉教授。

李禹煥 Lee Ufan

1936（昭和11）年-

韓国・慶尚南道に生まれる。1956年ソウル大学校美術大学を中退し、来日する。1961年日本大学文理学部哲学科を卒業。1962-65年日本画府に所属し、日本画の技法を学ぶ。1963年中央公論画廊にて初個展を開催。1969年美術出版社の第6回芸術評論募集に応募した「事物から存在へ」が入選する。その後、60年代の終わり頃から始まったもの派のメンバーとして、制作だけではなく批評の面でも中心的存在を担うようになる。1971年発表された『出会いを求めて』（田畑書店）はもの派の理論を支える重要文献となる。また同年「第7回パリ青年ビエンナーレ」への出品をきっかけにヨーロッパでの活動を展開し、1997年フランスのジュ・ド・ポーム国立美術館にてアジアの現代作家として初の個展が開催される。多摩美術大学名誉教授。